#1　万骨塔（下関市長府・功山寺）

山口県の同志社水脈 —今、新島襄と長州—

文と写真　本井　康博（大学神学部教授）

品川弥二郎

功山寺は下関・長府の古刹である。境内に長門尊攘堂（下関市立長府博物館）が佇む。吉田松陰門下の品川弥二郎が、尊王精神高揚のために帰独後の１８８７年に京都に建てたのが原型（現京都大学文化財総合研究センター）である。「長門にも」との品川の遺志を１９３３年に実現させたのが、桂弥一である。

この品川と新島襄はドイツ（ヴィースバーデン）で邂逅している。新島が岩倉使節団の務めを終え、当地の温泉で保養中、使節団副使の木戸孝允が、ドイツ留学中の品川と青木周蔵を引き連れて療養に来た。木戸とは再会、留学生とは初対面で

あった。新島が品川から受けた印象は、「中々才物」であった。

万骨塔

尊攘堂の隣に桂は万骨塔（#1）も建設した。勤皇の士を祀るために、全国各地から「霊石」を取り寄せた。

正面中央は京都府で、鞍馬石である。その上に「明治維新前　勤皇志士集会之所　京都薩州邸址」（#2）が乗る。薩摩藩邸（二本松屋敷）の石である。ここで結ばれた薩長同盟に、長州藩からは木戸や品川が立ち会った。

その跡地に立つ同志社大学は、品川ゆかりのこの「霊石」を長府に寄贈した。

#2　同志社寄贈「京都薩州邸址」の石（功山寺）

理事会記録には、桂氏に「寺小屋前庭の一個を寄付」、とある。現在、本学には薩摩藩邸を偲ぶものは皆無である。本州西端に据えられたこの石が唯一の遺物であろう。さらに、「群馬県　新島襄霊位誕生地」（#3）の石もある。

高杉晋作

功山寺は、高杉晋作が奇兵隊を旗揚げした地でもある。１８６４年のことで、新島密出国の年でもある。境内には晋作の像（#4）が立つ。

#3　新島襄の「霊石」（功山寺）

彼の支援者に入江和作（後述）がいる。新島は入江家で晋作情報を仕込み、日記に記す。「高杉氏ハ当時、長ノ策士。遥ニ木戸公ノ右ニ出タル人物ノヨシ。恨クハ先生、肺病ニ罹リテ死シ、自ラ維新ノ美果ヲ見サルハ、遺憾ノ至リナリ」と。

新島は留学中に知遇を得た木戸を高く評価していた。その木戸に晋作は勝るとも劣らないという。晋作と新島は生涯、見える機会に恵まれなかった。が、両者ゆかりの品々が死後、同じ境内に並ぶのは奇縁である。

ふたりには共通点がある。晋作も上海に渡り、『連邦志略』を購入した。晋作は梅を愛好する。墓所近くの東行

#4　高杉晋作像（功山寺）

庵（下関市吉田）には梅林がある。二人は百花に先駆けて花をつける梅が好きだった。志半ばで倒れた点も共通する。

吉敷

長州は維新の「勝ち組」であった。木戸孝允（#5）や伊藤博文、井上馨（#6）、品川らから新島が受けた厚遇は計り知れない。「勝ち組」はキリスト教とはそもそも疎遠である。近代日本のプロテスタントは、会津藩のように戊辰戦争「負け組」に支持者が多い。が、長州でも吉敷は別である。

#5　木戸孝允旧宅（山口市糸米・木戸神社）

会衆派牧師、沢山保羅（#7）と成瀬仁蔵（#8）を生む。長老派牧師の服部章蔵（#9）も、である。イエスの十二弟子中、二人を出した街に倣って、吉敷は「山口県のベッサイダ」とも呼ばれる。信徒ではないが、詩人の中原中也はカトリック家族の中で育った。さすがにザビエルの伝道地である。

内海忠勝

内海忠勝（#10）も、吉敷である。アメリカ留学から帰国した沢山保羅を15O円の高給で官界に誘ったのは、内海大阪府参事であった。沢山は「勝ち組」コースを拒否し、あえて月額7円の牧師の道を選んだ。新島が田中不二麿や森有礼からオファーされた出仕の誘いを断ったことと双璧をなす。

この内海は、新島をも支援した。新島が大阪で学校設立運動をした際、木戸の指示もあって、内海大阪府参事は磯野小右衛門（長州阿武郡出身の豪商）の寄附をとりつけてくれた。内海は新島と同年齢で、若いころ奇兵隊に馳せ参じている。新島同様、岩倉使節団に大使随行員として加わった。

#6　井上馨像（山口市湯田温泉・高田公園）

#7　「沢山保羅生誕の地」碑（右は旧居。山口市吉敷）

#8　「成瀬仁蔵氏誕生地記念碑」（山口市吉敷）

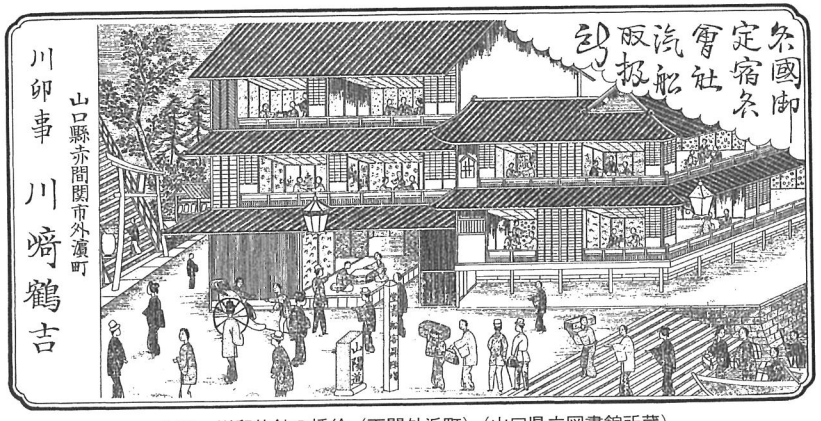
#9　服部章蔵旧宅（山口市吉敷）

#10　「内海忠勝顕彰碑」（山口市・木戸神社）

新島襄が長州訪問

ところで、新島の長州訪問は、188O年10月、今治から博多に赴く際に立ち寄っただけである。21日の朝に今治を発ち、美津が浜（松山市）で船を乗り継いで、夕方、上関に入港。三田尻（中関）を経て、下関（馬関）には23日午前3時30分の到着である。

すぐに川卯旅館（#11）に入る。早朝



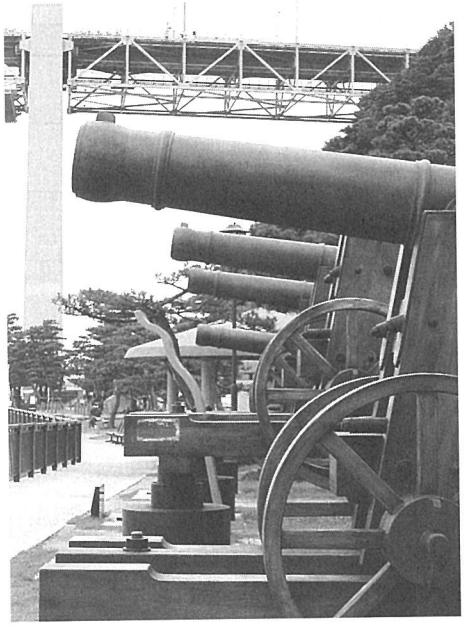
#11　川卯旅館の挿絵（下関外浜町）（山口県立図書館所蔵）

には手紙3通を認め、温泉に浸かった。それから「壇ノ浦ノ砲台」（#12）を見物し、午後、3軒の家庭を訪問した。

下関の新島襄

田中町の服部章蔵牧師、信徒の栗屋正臣、入江和作の家（#13）である。他教派をも激励したかったのだろう。この時、新島は入江から十数年前（1864～1865年）の「長州騒動」（長州征討）を聞き取り、日記に克明に記録する。

入江に送られて宿に戻った新島は、その夜、10時半発の船で出港した。下関滞在は正味1日（早朝から深夜まで）であった。帰りは12月3日で、未明に入港、すぐ美津が浜に向かった。



#12　壇の浦砲台跡（下関市・みもすそ川公園）

#13　入江和作旧宅跡（山口銀行下関支店・下関市田中町）

下関伝道

下関は山口県ではプロテスタント発祥の地である。しかも、新島が訪ねたのは、教会胎動期であった。主軸は服部（東京築地一致教会長老）と青山昇三郎（東京本郷教会）である。前年5月に東京から転じ、服部はすでに自宅にキリスト教主義学校（光塩英学校。現梅光女学院）まで開校させていた。

牧師を助けた地元名士が入江と栗屋（国学者）であった。入江は宣教師から、新島と会う5カ月前に洗礼を受けたばかりで、自宅を集会所にしていた。栗屋も6月に青山から洗礼を受けていた。こうしたことも手伝って、新島の訪問から2カ月後には、山口初の教会（現日本キリスト教団下関教会。#14）が誕生する。

#14　下関教会（日本キリスト教団。下関市田中町）

弘中又一

新島永眠の月に長州（現周南市）から青年が同志社に入学した。弘中又一である。クリスチャン数学教師として松山中学校に赴任し、漱石に出会う。そして『坊ちゃん』のモデルとなった（拙稿「弘中又一」、『同志社山脈』所収）。

最後の教鞭は同志社中学校である。田畑忍（元同志社大学長）は恩師を「脱俗」と評する。新島の命日には墓参りを欠かさなかった。今は生家（#15）に近い常照院（湯田温泉）にひっそりと眠る（#16）。境内の記念公園（#17）の碑は、「教育は王道なり」と刻む。最期まで新島の門弟であろうと志した。

#15　弘中又一生家（周南市湯野温泉）

#16　弘中又一の墓（中央。周南市湯野温泉・常照院）

#17　弘中又一公園（周南市・常照院）